

トルコ、エジプト、バレーン、スーダン、北イエメン、チュニジア、イスラエル、ギリシャ、サウジアラビアを巡回した。第二次に、ギリシャ、トルコ、バレーン、スーダン、イスラエルを巡回した。巡回が終わると、アメリカに行つて先生の前で報告し、個々の国に対する報告は現地から書面を通してやった。

「一度世界のあちこちを巡つてみることもよからう」とおっしゃり、世界巡回師として選んでくださった先生に、心から感謝してやまない。多くのことを見て、そしてまた学んだ。山を越え海を渡り、自分の生涯において二度と訪れることができない、価値ある時間を持つことができた。それはお金をもつて買えるものではないであらう。

神様は韓民族を哀れまれ、偉大なる真理の師である文鮮明先生を通して、統一原理を下された。世界に広がっている宣教国家の食口たちが先生のことを真の父として仰ぎ、自分たちが持っているあらゆる誠を尽くしている。これはどんなに神様に感謝すべきことだろうか。

先生は、今最後に残っている問題は愛の革命だとおっしゃった。神を中心とした愛の革命は全人類を統一し、一つの世界をつくるであらう。これは人間の意思によるもので

はなく、神の創造目的であり、約束なのである。私ははっきりと見、そして確認した。世界至る所に、統一原理を中心とした統一主義の波がうねっている。この統一主義は真なる愛の主義として人類の霊的な渴望を満たしてくれるであらう。世界巡回中、さまざまな人やことと出会って感じたことを流してしまふことができず、自ら編んだのが「栄光と廢墟」という本である。後日宣教の足跡を辿る使徒行伝となるだろう。一九八三年、アメリカで「神の日」を送り、新しい命令によって、コロラド、ユタ、カンザスなど六か州を巡回するようになった。その後アメリカを離れて韓国へ帰つてきた。

今も、中東の砂漠の国やアフリカ奥地にいる食口のために企画したさまざまなことが、走馬燈のように思い出される。先生に捧げた報告書、食口たちに書いた手紙、「統一世界」に載せた巡回記なども思い出として残っている。

山の頂上からの見晴らしは美しいであらう。しかし、その谷間をもっと魅力的ではなからうか。頂上の雄大さは谷間に行つて初めて味わうことができるものであらう。信念をもつて闘ってきたこの道、余生も挫折せずに、最善を尽くしていこう。

(完)

◆◆◆

話

◆◆◆一九九二年五月三十一日 仙台教会にて

## 女性時代の開幕と柳寛順精神



韓国統一思想研究院院長

李相憲

### 新しい約束

親愛なる東北地方の皆様、四月十日のソウルのオリリンピック競技場で開催された世界平和女性連合の創立大会を契機として、歴史は現在、女性の時代に入りました。そこにまた柳寛順の摂理が関連しています。

女性の時代が始まったということは、男性の時代が終わったという意味です。男性の時代が終わったということは、聖書の時代が終わったということです。キリスト教を信じる人たちは話にならないというかもしれません。聖書

は約束の書です。旧約は旧い約束、新約は新しい約束です。それは神の約束ですから必ず果たされます。約束が果たされれば、その時約束の時代は終わるのです。約束の時代が終わるといふことは、すなわち聖書の時代が終わるといふことです。

神は旧約時代の摂理的な人々に約束をしました。アブラハムにも、ヤコブにも、モーセにも約束しました。そのほか多くの預言者たちにも約束をしました。そして最後の約束はメシヤを地上に送り、新しい天と地をつくるという約束でした。その旧い約束はイザヤ書の六五章と六六章にあります。





「世界平和女性連合」創設大会で基調演説される韓鶴子総裁（1992年4月10日）

性愛の実現です。しかし墮落のため、エバの理想は実現されなかったのです。その結果、その理想は霊的な心のかたまり（心象体）となつて、女性の理想像として、母性の理想像として、イエス様が現れるまでの四〇〇〇年の間、天のみ旨に積極的に協力しつつ、霊界と地上を往来しながら、時が来るまで待っていたのです。実体がないからです。肉身を持たなければ霊人体もありません。

み霊は当然、実体の衣を着るようになっていました。その実体化はイエス様（第二アダム）の降臨の後に、イエス様によってなされることになっていました。すなわち、もしイエス様が十字架で死ななかつたら、地上で選ばれた一人の女性がイエス様のみ言によって再創造されて、イエス様の花嫁となつたとき、その女性に、宇宙を往来していた霊的な心象体すなわちみ霊が合体して、実体化された母性すなわち実体を着たみ霊になるのです。

イエス様は、語ることがたくさんあるけれども、あなたがたは、そのことばに耐えられないので、今は話せないと言われました。墮落後から始まった神の摂理の重要な内容をもってイエス様は来られたのです。しかしその時は、その内容を秘密にしておくしかなかったのです。ヨハネ伝の

そして約束どおりに、イエス様が来られました。しかし、新天地は約束どおりに実現されませんでした。それでも一度約束をし直さなくてはならなくなつたのです。それが新しい約束です。その約束は黙示録にあります。聖書の最後の章である黙示録の内容はイザヤ書の六五、六六章と同じような約束です。すなわちメシヤが来られて、人の目から涙をなくし悲しみをなくし、そして新しい天と新しい地を建てるといふ約束です。

新しい天と新しい地の詳しい内容は、メシヤが来られてから明らかにされます。その新しい約束が終わるのが、聖書の最後の章であるヨハネの黙示録の二二章です。特に二二章の一七節が重要です。そこには次のように書かれています。

「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また、聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに來るがよい。いのちの水がほしい者は、備なしにそれを受けるがよい」。

「この「聞く者」とは「話を聞いてその意味を理解しう

る者」「常識をもつたもの」という意味です。「かわいている者」とは、真理に飢えている者のことです。なぜ真理に飢えているかといえば、終末の時には、個人問題、家庭問題、社会問題、国際問題、政治問題、経済問題など、すべてが壁におつかつて、どうしたらいいのか全く分からなくなるからです。それで、それらすべての問題を根本的に解決し得る真理を知りたい者は来なさいと言っているのです。それから、「いのちの水がほしい者」の「いのちの水」は真理のみ言のことです。

そして「きたりませ」は「集合しなさい」「大会に集まりなさい」という意味です。そして、その集まった大会が四月十日の世界平和女性連合の創立大会なのです。それではみ霊と花嫁とは何でしょうか？「原理解論」にもあるように、み霊とはエバの神であり、母性の神をいいます。それは霊的な存在ですが、霊人体ではありません。

アダム・エバが墮落しなかつたら理想の世界が実現されたはずですが。しかし、アダムとエバが墮落して理想を果たせなかつたのです。神は、アダムにもエバにも各々理想をもたせて、愛の家庭、愛の国を実現させようとなさつたのです。そのうち、エバの理想は神を中心とした女性愛、母



一六章一二―一三節には次のように書かれています。

「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今ほそれに堪えられない。けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」。

### 人間の責任分担と墮落

人間の墮落に関わった三つの存在はアダムとエバとルシエルです。そして人間墮落の責任は本当はルシエルにあったのです。しかし神は天使長に責任分担を与えていないので、天使長がいくら誤っても責任を追求できません。価値という点からいえば、天使長は人間に比べれば万物ではないのです。それに対して神の子であるアダムとエバの価値は大きく、彼らには責任分担が与えられており、したがって責任を追求されるのです。

神が人間に責任分担を与えたのは、人間が自分の努力で

自分をつくれれば宇宙をつくったのと同じ価値を人間に与えるとともに、人間に宇宙の主管権を与えるためであったのです。したがって墮落はアダム・エバから始まったのです。先にエバが墮落しました。そのとき、墮落がエバで終わっていたら、神はアダムを通じてエバを復帰できたのです。けれども、アダムまで墮落したので復帰の道が閉ざされてしまいました。アダムと宇宙の価値を比べて、神はどちらを捨てるか、二者択一を迫られるとすれば、神はアダムを生かす道を選んだでしょう。それほどまで、神にとつてアダムの価値は大きかったのです。そのアダムをエバが墮落させたのです。

人類歴史において、人間の犯した罪はたくさんありますが、エバがアダムを墮落させた罪ほど大きい罪はなかったのです。それはちょうどイスラエル民族が、第二アダムであるイエス様を不信仰したときの罪と同じです。そのとき、イスラエル民族を滅ぼしてまでもイエス様を生かしたかったの神の心情でした。そのようにアダム一人の価値は大きいのです。そのような価値あるアダムを墮落させたのだから、エバ(女性)の罪は非常に大きいのです。

み霊はイエス様の霊的な花嫁であり、イエス様の教えを

受けて、それを人類に知らせるのです。イエス様が三十三歳で亡くなり、旧約束は成就されませんでした。そのため再臨して、花嫁を迎えて子羊の宴会を持つようになるのです。再臨のメシヤによって、ついにみ霊が実体を着るようになりました。そのかたがすなわち、お母様です。そして、「六〇〇年前に誤って人類を墮落させたエバに代わって、私は実体のみ霊として、メシヤのみ言を今皆様に知らせます」というのが、四月十日の世界平和女性連合の大会で、お母様の基調演説であったのです。ではその基調演説の内容は何であったのでしょうか？ それは主として、血統転換の摂理に関するものでした。そのことについて、これから説明します。

### 血統転換の摂理

皆様、ご存じのように、イエス様は神の真の愛と、真の生命と、真の血統をもつて来られました。ところが現実的には、イエス様の血はイエス様をはらんだマリヤの血です。マリヤがイエス様をはらんだからです。ではマリヤの血はだれの血ですか？ ずっとさかのぼっていけば、最後には

墮落したアダムに行き着くでしょう。そうするとマリヤの血は墮落の血ということになります。その血を受けたイエス様が、どうして神の血統になるのでしょうか？ それは神の血統転換の摂理によって分かるのです。

そのことをこれから説明しましょう。墮落によって、人間はみなサタンの血統を受け継ぎました。それでサタンの血統を断ち切つて、神の血統を受け継ぐためには、神の血統を受け継いだ子を生ませる母が必要となります。神はアダムを土をねってつくりました。だからといって、新しいアダムをつくるために、また土からつくればよいかといえは、そうはいきません。墮落した人間を、墮落しなかつたと同じような立場につくり直すのが復帰です。そのためには罪のない、神の血統を受け継いだ神の子を、ある母性にはらませることが必要です。すなわち神の子を生む母が必要で、その神の子とは、長子権を復帰した立場の神の子でなければなりません。そこでサタンの側を離れて、神の側に立つ母性を分立しなければなりません。そのような摂理が必要となったのです。その摂理が、リベカ、タマル、マリヤという三段階の母性の分立の摂理であったのです。

お父様は今までこのことを断片的に話されましたけれ



ど、今回、お母様がその内容をみな整理して話されました。お母様の基調演説を見れば、過去・現在・未来を通じた、今までの歴史の秘密を公に宣布されたことが分かります。地上だけでなく霊界に対しても、六〇〇〇年の神の摂理の隠された内容を、すべて明らかにして、宣布されたのです。今までが過去、これからが未来といったように、過去と未来の境目をつくるのが、今回の基調演説による「宣布」です。それでこの宣布を成すことによって、四月十日以降、女性の時代が始まったのです。

### リベカ

それではこれから母性の、神側への分立の摂理についてお話しします。リベカが妊娠したとき、彼女のおなかの中でふたごが争いました。そこでリベカは「天のお父様、これは一体どういふことですか?」と聞きました。それに対して神は、「兄弟が争っているのだが、将来兄が弟に仕えるであろう」と答えました。リベカはその神のみ言を絶対的に信じました。そしてエサウとヤコブというふたごの兄弟が生まれましたが、リベカは弟のヤコブをより多く愛し

ました。そして夫やエサウをだましてまで、弟を出世させようとした。

当時の風習や慣例や法律からみたと、家長をだますということはあり得ないことです。そのようなことがばれたら、ひどく罰せられます。それを知りながら、リベカは夫のイサクをだまして、弟のヤコブに長子の祝福を受けさせたのです。そのことをエサウが知って、ヤコブを殺そうとしました。その時リベカはまたイサクをだまして、ヤコブをハランの地に避難させました。もし避難させなかったならば、実際にヤコブは殺されたでしょう。それほどまでに重大なことだったので。

そのような重大な結果になると知りながらも、夫をだまし、エサウをだましたのがリベカです。当時の常識では考えられないことです。しかしそれは神の摂理であったのです。そのことによって、リベカが母性として蘇生的に神の側に分立されることになったのです。

### タマル

次はタマルです。タマルは自分の夫が死んでしまったの

で、子供ができなくなりました。そこで義父のユダは次男を与えました。ところが次男は、タマルに子供を与えようとしなかったため、神が命を奪いました。そして三番目の息子は若すぎました。それでタマルは義父に命ぜられて実家に帰っていたのです。

その間、タマルは何としても血統を残さなくてはならないと思いつながら、ゆううつな生活を送っていました。ある日、舅のユダが近くに来るといふ話を聞いて、タマルは道端で、顔を隠して、売春婦の姿をして、ユダを誘惑しました。ユダは誘惑されて「今夜おまえの家に泊まるぞ」と言いました。そのとき、タマルはユダに「何か下さいますか」と申し出ました。ユダが「やぎの子をやるう」と言うのと、タマルは「それを下さるまで、何かしるしを下さい」と言いました。

それでユダが「どんなしるしが欲しいか」というと、タマルは「あなたの印と紐と杖を下さい」と言うので、ユダはそれらを与えました。そうしてユダはその晩は泊り、翌日、旅先から、使いの者に「隣村に売春婦がいるから、やぎの子を持って行って、預けたものを取り戻してください」と命じました。それで使いが行って、いろいろ探してみま

したが、みな「ここには売春婦はいません」というのです。しかたなく、使いはそのまま帰ってユダに報告したのです。

それから三か月たつて、うわさが起きました。ユダのところの嫁が、だれかと姦淫を行って妊娠したというのです。そこでユダは、捕り手に命じてタマルを捕まえて死刑に処せよと言いました。捕り手は命令どおりにタマルを捕らえて処刑場に連れていこうとしました。するとタマルは、印と紐と杖を見せながら、「私は、この印と紐と杖の主人によって、みごまりました」と申し開きをしたのです。捕り手は帰ってきて、その証拠物を見せながらタマルの言葉をユダに伝えました。するとユダは「彼女はわたしより正しい」と言いました。これは「タマルは自分より、もっと天のみ旨に忠実である」という意味であると、いつかお父様が話されました。ユダがタマルを許したのはいうまでもありません。

その後、タマルから生まれたのがふたごのベレツとゼラです。腹中において、ベレツは弟で、ゼラはお兄さんです。が、生まれるとき、弟のベレツは兄のゼラを押しつけて先に出ました。これは弟のアベルが兄のカインの長子権を復帰したことを意味します。これはタマルが神の血統転換の



摂理において、非常に重要な経緯に貢献したことを意味します。そのことよって、長子権を持った神の子が地上に降臨しうる条件が成立したからです。

## マリヤ

このタマルの基台の上にマリヤが召されました。天使ガブリエルが来て言いました。「あなたは神の子を授かります」。その時、マリヤは「わたしは主のはしためです。お言どおりにこの身に成りますように」と言いながら、神のお告げのとおりにしたのです。我々はこのときマリヤの心情を理解しなくてはなりません。当時の風習は、淫行の女性は石で打ち殺されるのでした。それでマリヤは、そのとき、殺されることも覚悟したはずで、また神の守護によつて殺されることは免れるとしても、十か月の妊娠中、いろいろな耐えがたい悪評が立つことも知っていたはずで、ですから死を覚悟して、み旨に従順に従ったのです。

このようにして蘇生・長成・完成の三代の母性の、神側への分立の摂理が成されました。サタン世界から神側への

の一言が神様を非常に喜ばせました。

その後、十か月の間にマリヤの受けた蔑視、あざけり、苦痛は大きいものでしたが、そのような中で、マリヤは最後まで、天使が伝えた神のみ言を守りとおしました。このようにしてついに、イエス様がお生まれになったのです。マリヤは天のためにすべてを捧げたのです。それでマリヤはサタンの讒訴圏を完全に逃れて、神側に立つてイエス様の母となったのです。ところでこのとき、マリヤとイエス様の関係は、文字どおり、母と子の関係だったでしょうか？ そうではありません。なぜならマリヤは神の側に分立された女性であり、イエス様は神のひとり子であるからです。イエス様は神の子であつて、マリヤの子ではありません。

すなわちマリヤの身体は、神様がイエス様をつくるための聖なる材料、聖別された清い材料であつたのです。神は最初のアダムを土でつくり、息を吹き込みました。その息がアダムの霊人体でした。肉身だけでは類人猿のようなものでしかありません。アダムに霊人体が入り、神の愛と生命と血統が与えられました。そうしてアダムは生霊（生きもの）となつたのです。同様にして、神はマリヤの体を、

三段階の、母性の分立が成されたのです。なぜサタン側から分立されるようになったかといえば、生命を懸けてサタン世界の法律や習慣を否定し、また父と子をあざむいたからです。このことがなぜ必要かといえは、蕩滅復帰のためです。すなわちエバが墮落する時、法（神のいましめ）を否定（背反）し、父と子（神とアダム）をあざむいたことを蕩滅復帰したのが、この三人の女性の行動であつたのです。その結果、サタンはこの三人の女性を讒訴できなくなりました。なぜなら、責任分担保を与えられていたエバが自由意志でサタンの側に走つたことを神は止めることができなかつたのですが、三人の女性はそれを逆の方向に蕩滅復帰した立場に立つたからです。

それで三人の女性はサタン世界を越えて神側へ入つたのです。とくに三人の中でも、マリヤの立場がそうでした。マリヤは婚約中の処女でありながら、死罪に値することを知りながら、死を覚悟して身ごもりました。その時、もしマリヤが「いやです」と言つて拒否したら、イエス様は来られず、神の摂理はその後、また何千年も延長したはずです。実に、歴史の運命が左右されるという重大な瞬間でした。その時マリヤは「お願いします」と言つたのです。そ

土のような材料として使つて、まず肉身をつくり、それに息（霊人体、愛、生命、天的血統）を注入して、神のひとり子としてのイエス様をつくられたのです。このようにしてイエス様は、神の血統を持った神のひとり子として生まれました。それでイエス様はthe only begotten son となりました。英語でthe only begotten son とは、唯一の父の子である（母の子でなく）という意味です。父である神が生んだ子であるということです。このようにして墮落した人間の中から、聖別されたひとりの女性が現れて、その女性から神のひとり子が生まれたのです。この摂理が血統転換です。

## イエス様と聖霊

その後、イエス様は成長して、花婿となるはずでした。すなわち成長して、墮落した人間世界から一人の女性を復帰して、花婿にして、結婚されるはずでした。そして、その復帰された花婿をみ言で教育して（再創造して）、真理と愛の完成者に成長させたはずで、そうすればその時、それまでみ旨に協力していたながら天宙を往來していた聖霊



がその花嫁と一体化して、実体を着た（持った）聖霊すなわち実体の聖霊となったはずです。そして聖霊（花嫁）がエバ（人類の母）の立場で、イエス様に代わって真理を伝えなくてはならずです。

しかしイスラエル民族の不信仰ゆえに、イエス様は十字架にかけられ、そのことを成就できませんでした。それで二〇〇〇年後に、再臨してその結婚を成就されたのです。すなわち地上から一人の女性を人類の代表として復帰して、花嫁にして聖婚（小羊の宴会）を行い、さらに神の真の愛、真の生命、真の血統を相続させたのです。そしてさらに、み言で教育し完成させて、「聖霊と花嫁との一体化」すなわち実体の聖霊とならされたのです。そしてヨハネの黙示録二〇章一七節の聖句にある内容を成しとげられたのです。その大会が世界平和女性連合の創立大会であり、み言を発表されたかたがお母様なのです。

このようにして、神の血統を受け継いだ人類の父母が現れたのです。その次は人類の救済ですが、人類が救済されるためにはサタンの血統を立ち切って天の血統につながるなければなりません。それが聖書にあるように、野生のオリーブを切って、良いオリーブに接がせるということです。

争も克服できなかったし、価値観の崩壊も阻止できず、世界の混乱も阻止できませんでした。それでも男性には任せられないのです。そこで女性が決起して、価値観を立て直し、道徳倫理を立て直し、社会を立て直すのです。

今、人類は完全に混乱状態にあります。それを最も心配するのが母親であり、妻であり、娘です。女性です。女性は訴えれば「そうだ」と立ち上がりやすいのです。それでお母様が韓国の二十一か所の都市を回られたのです。女性の時代はお母様を中心としています。その背後にお父様がおられます。結局集った人々はお父様とお母様のみ言を聞いて、真理と生活の正しい方向を悟るのです。

今まで、儒教や仏教や神道など、たくさん宗教が現れましたが、それぞれ、その時代の人々を少しづつ天の方に向けさせただけであって、人類の根本問題を解決できませんでした。そして今日、従来の宗教や思想は限界にきてしまいました。墮落の問題を根本的に解決しなければ、いかなる宗教も現実問題を解決できないのです。今回の大会を通じて、霊界の人たちも皆分かったことでしょう。それだから、霊界が総動員して、み言を協助するようにあります。

我々人類はみな野生のオリーブであり、サタンの血統です。それでサタンの血統を切って天の血統につながる必要があります。その過程が祝福なのです。

### 世界平和女性連合

このようにして、将来、人類は神の血統を受け継ぐようになります。そして地上にサタンの要素が全くない地上天国が実現されるのです。それを模範的に示したのが、世界平和女性連合創立大会での一二〇〇双の祝福です。一二〇〇は十二の一〇〇倍ですが、十二という数は、理想世界をつくるときの核心的要素です。十二数でもって、地上と霊界まで治めるようになっていきます。そのような大きな意義があるのが一二〇〇双なのです。

実体のみ霊が、実体の女性神であり、人類の母です。このかたを中心として新しい世界に入っていきます。人類の母は、まず全世界の女性を先に復帰します。なぜならばアダムの墮落させたのは女性ですから、全女性に連帯責任があるのです。

神は今まで男性に歴史を託してこられました。しかし戦

### 柳寛順精神を称える会

それでは次に、柳寛順とこのような女性の時代の開幕と、どのような関係があるのかをお話したいと思います。四月二十七日、お父様から「日本は女性国家であるから日本の朝総連と民団を和解させることによつて、カインとアベルを生み直したという条件を立てて、エバ国家日本とアダム国家韓国が一つにならなければならない」というみ言がありました。それで柳寛順大会と並行して、北韓に属する朝総連と南韓に属する民団の和解運動が進行中です。この和解運動も、柳寛順の愛の精神を中心として展開しています。

韓国の独立運動に身を捧げた人はたくさんいます。それなのになぜ、十六歳の幼い女子にすぎない柳寛順をそれほどまで称えるのでしょうか。「愛国者・柳寛順」として各地に銅像が建てられています。そればかりでなく、お父様が柳寛順の名前をあげられました。それで永遠に残る名前となったのです。

柳寛順の名前を永遠に残す理由がどこにあるのでしょうか





アジアのジャンヌ・ダルク柳寛順精神をたたえる西東京大会  
(1992年6月12日・武蔵野市民文化会館にて)

う。それはマリヤと同じ立場にあったからです。マリヤがイエス様をはらんだのは十六歳の時でした。柳寛順も同じ年でした。そして柳寛順はマリヤと同じく、生命を懸けて神に忠誠を尽くしたのです。その柳寛順を、お父様は聖女と呼ばれました。

柳寛順は梨花女子校の生徒であり、キリストの精神、十字架の精神を知っていました。そのキリストの精神で、苦難を受けて虐殺されたのです。それが蕩滅条件となりました。それで彼女は神の摂理に非常な功績を残したのです。どのような蕩滅条件かといえば、エバの罪に対する蕩滅条件です。エバは墮落して人類歴史上、後にも先にもない大きな罪を犯しました。全宇宙とも取り換えられない価値を持つているアダムを墮落させたのです。そのようなエバの罪に対して、「私の苦難を交換条件としてエバを許してください」という女性が現れなければ、地上にメシヤが現れることはできなくなっていたのです。

十六歳の少女であった柳寛順は、そのような立場でエバの大罪を蕩滅して、犠牲になりました。エバが十六歳で墮落したのと同じ年齢で、メシヤを迎えるために、エバの罪を蕩滅すべく供え物になったのです。メシヤは花婿の立場

で来られます。そして救われるべき人類は花婿の立場です。ですから花婿の立場にある人類を代表して、メシヤを迎える女性が必要なのです。聖書には、乙女たちが、あかりを手にして、花婿を迎えるとあります。それで女性が現れて蕩滅条件を立てるのです。

柳寛順はまた熱心なキリスト教の信者でした。それでキリスト教信者である柳寛順が犠牲になったということは、新約の宗教であるキリスト教がメシヤを迎えるにあたって蕩滅条件を立てたことになるのです。次に、柳寛順が参加した独立運動はメシヤを迎える民族の不信仰（天道に逆らう行動）を蕩滅するためのものであります。それでこの民族はかくも多くの血を流したのです。かつてのイスラエル民族の歴史を見れば、いつも異邦人によって侵略されてきました。それは彼らが信仰を守りとおさなかったからです。不信仰に陥ったイスラエル民族に対して、神は何度も預言者を送って悔い改めさせようとしてきました。

しかし彼らはその度に信仰を失っていききました。そのため彼らは異邦人から打たれて血を流すようになったのです。そうしなければ不信の民族の罪が許されないのです。同じく韓国においても、王や政治家たちが天道を無視し、

乱れていました。そのままではメシヤを降臨させることはできません。それでこの民族を打って天に対する姿勢を取り戻さなくてはなりません。そのため三・一運動が起きたのであり、多くの犠牲者が出たのです。その中で柳寛順の犠牲も生まれたのです。

このようにして民族的にもメシヤを迎える条件が整い、キリスト教としてもメシヤを迎える基本的な条件が整ったのです。エバは神の娘であり、妻となり、母となる身でした。ですからエバの愛は、娘の愛であり、妻の愛であり、母の愛です。このような愛をエバは墮落によって失ってしまいました。これを復帰するために、柳寛順は自身をささげたのです。そしてエバの罪を蕩滅復帰して、アダムを迎える資格を得たのです。それでその翌年、地上にメシヤが生まれることになったのです。

柳寛順は十七歳で亡くなりました。それを受け継いで十七歳のお母様が復帰され、十七歳で聖婚式を迎えられたのです。このようにして柳寛順はお母様が来られる基礎をつくり、メシヤを迎えるエバとしての蕩滅条件を立てたのです。

日本は女性国家ですから柳寛順の愛と思想を受け継い



で、朝総連と民団を和解させる使命があります。墮落したエバは罪の子のカインとアベルを生みました。したがって、復帰されたエバはカインとアベルを生み直さなければなりません。それでエバ国家である日本は、柳寛順の愛の精神を受け継いで、カインの朝総連とアベルの民団を生み直して和解させるのです。そうすることによって日本は国家として、メシヤを迎える資格を得るのです。そして日本と韓国が一つになるのです。

皆さん、お父様と金日成が会うとは思わなかったでしょう。私も全く予想できませんでした。それを可能にしたのが天の摂理です。ですから、日本と韓国も神の摂理によって必ず一つになるのです。不可能に見えても神の摂理は必ず成就するのです。

私は柳寛順の大会に参加して、韓日の一体化が間違いないと成されると確信しました。参加者はみなチマチョゴリを着ていましたが、彼女たちの話す言葉は日本の文化の象徴であり、チマチョゴリは韓国の文化の象徴でした。日本の文化が韓国の文化を着ていたのです。それは日本の文化と韓国の文化が調和した象徴的な姿でした。神の摂理はまず象徴的になされ、次に形象的になされ、それから実体的になされます。歴史は夜つくられるといいますが、見えな

ところで歴史は出発しているのです。種が地にまかれたとき、目には見えませんが。しかしその種が根を下ろして実を結びます。それと同じように、皆様の燃えるような情熱や生命力は、遠からずして実を結ぶのです。その時を、だれもさげざげすることはできません。

このようにして女性の時代が始まりました。そしてその後には柳寛順の犠牲精神があつたのです。この愛の精神を女性国家である日本が受け継いで、カインとアベルを一つにし、それを土台として韓日が一つになるのです。アダムとエバが一つになる前に、心と身体が一つにならなくてはなりません。民団は精神の立場を象徴し、朝総連は物質の立場を象徴しています。共産主義は物質主義だからです。

したがって民団と朝総連の関係は心と身体の関係でもあります。それで朝総連と民団の和解は体と心の統一に値するのです。すなわち、韓国と日本が一つになる前に、朝総連と民団が一つになることは、アダムとエバが結合する前に（第二祝福の前に）、心と体が一つになる（第一祝福を完成する）ことに匹敵する重要な摂理となるのです。以上、「女性時代の開幕と柳寛順精神」という題目の講話をすべて終わります。最後に、日本の兄弟姉妹の皆様方のご成功をお祈りいたします。ありがとうございます。

東京教会

聖日礼拝

一九九一年十一月十七日

## 愛は力である

サタンは何で屈服するのでしょうか。お父様の偉大な勝利は、サタンが及ばないその一点を見つけたことであり、それが犠牲の愛なのです。

### 見えない愛

きょうは、「愛の力」または「愛は力である」というテーマでお話してみたいと思います。

皆さんの中で愛という言葉聞いて嫌な気持ちがある人はいませんか。愛という言葉を聞くと、私たちは何かうれしくなり、ほのほのとした思いがわき、希望がわき、力がわいてきて、そこから命が出てくるのではないのでしょうか。愛を受けるとだれでもその胸がときめくのです。そして、愛を与えると自分の心は本当に喜びにあふれるのです。そのような私たちの人生において、愛が本当に大切なもので

あることは知っていますね。

人生において私たちはさまざまなものを求めてきましたが、愛以上のものを求めたことがあるのでしょうか。愛は私たちの人生において一番素晴らしいものであり、一番大切なものです。ですから、それが正しい生き方であればもちろんのこと、間違つた生き方であったとしても、愛のためには命を犠牲にするのです。たとえ心中のようにその愛が狂っていたとしても、愛のためには命を犠牲にすることができるのです。

それはなぜでしょう。それは命から愛が出てくるのではなく、愛から命が出てきたからです。愛の動機なくして

本部教育部長 周藤 健